



Title	献辞
Author(s)	長岡, 新吉
Citation	経済學研究, 35(3)
Issue Date	1986-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31700
Type	bulletin (article)
File Information	35(3)_Pv-vi.pdf



[Instructions for use](#)

献 辞

松井安信教授は、本年3月31日付をもって定年退官される。私たちは、永年にわたり北海道大学とわが経済学部のために貢献されるところきわめて大きかった教授を、尽きることのない惜別の情をこめて、北大のキャンパスからお送りすることになった。

教授は、昭和23年3月九州大学経済学部を御卒業後、同大学大学院（旧制）の特別研究生として研究者への道を歩まれ、昭和28年4月西南学院大学商学部の助教授になられた。そして、同大学に9年間御勤務ののち、昭和37年4月迎えられて本学経済学部助教授に御就任、3年後の40年7月教授に昇任された。

教授が本学に御着任になられた当時、経済学部の教官研究室は、現在の大学本部事務局の建物、付属図書館、旧大学予科校舎の南端の一棟に分散していた。南国にお生まれの教授は、その一つ、厳寒には「シベリア街道」の異名をとる渡り廊下でつながれた旧予科の老朽校舎の一隅に拠点を構え、御生地福岡県とは異質の風土での新たな研究と教育への第一歩を印されたのであった。それから24年の歳月が流れ、研究室、教室、そして事務室も面目を一新し、旧予科の校舎は跡形もなく消え失せたが、教授の研究者としての御精進と教育者としての御努力は、その間一貫してたゆみなく続けられてきたのである。

教授の御専門は、貨幣論・信用論である。マルクス経済学とイギリス金融史にかんする深い造詣に裏打ちされた論考を、本学御着任以前から精力的に発表してこられた教授は、わが学部においてもその研究を継続され、その成果は、昭和39年の『イングランド銀行券の二重性に関する研究』としてひとまずまとまり、同年、教授は、この論文によって経済学博士の学位を授与された。

その後、教授は、マルクス『資本論』の方法に対する独自の省察を前提に、景気循環と信用制度の関連の理論的解明を行ないつつ、いわゆる「不換銀行券論争」に批判的検討を加えた『信用貨幣論研究』（昭和45年）を世に問われる。この論争で浮彫りになった理論的問題を吟味しながら、それを国家独占資本主義体制の理論的解明にも適用できる方法論として構築しなおすこと、これが本書の主要な狙いであったと拝察する。3年後の昭和48年、教授はさらに『マルクス信用論と金融政策』を公にされた。マルクス信用論の『資本論』における理論的位置の論究に始まり、資本主義の発展と金融政策の主体との関わりにかんする学説史的検討を経て、国家独占資本主義体制下の金融政策の諸相の分析におよぶ本書は、前著と同じように、現代資本主義の運動法則の解明という現実的問題関心に支えられた、理論と実証の双方にまたがる教授の優れた学問的所産であった。この年の2月、教授は1年間の海外留学の旅に立たれたので、本書は教授が日本を留守にしておられたときに世に出たのであるが、とにかく、以上の二つの著作によって、教授は、学界における不動の地位を築かれたのである。

このように、たゆみなく研究を続けられるかたわら、教授は、貨幣論と銀行論を講じて学部学生の教育に情熱をもって当たられると同時に、大学院経済学研究科において後進の育成に多大の努力を傾注された。教授の教育者としての御功績は、学部での優れた御講義もさることながら、今日学界の第一線で活躍中の数多くの研究者を教授の門から巣立たせたことにおいて一段と光彩を放っている、としてよいであろう。教授が編まれ、学界から好評をもって迎えられた『金融資本論研究』（昭和58年）は、その門下生を中心とするヒルファディング『金融資本論』の徹底的・内在的研究の成果であった。

教授は、金融学会、証券経済学会、経済理論学会、北海道経済学会等の理事としてこれら学会の発展に寄与される一方、学内においても、昭和44年8月から同46年7月まで評議員、昭和53年1月から同54年12月まで経済学部長（大学院経済学研究科長併任）として大学と学部の運営と発展に多大の貢献をされた。教授は、評議員時代、いわゆる大学紛争の渦中においてその解決に多くの労力を費やされるとともに、紛争を契機に設けられた大学改革検討委員会の副委員長の重責を担われた。学部内においては、経済学研究科長に御就任後、当時の研究科の最大の懸案事項であった経営学専攻博士課程の設置に全力をあげて取り組まれ、その目的を達成された御功績が特筆されねばならない。

教授は、誠実・温厚なお人柄の奥に、いかにも九州男児らしい剛毅な部分を秘めておられる。古武士の風格、と申し上げてもよい。教授は、太平洋戦争末期のあの「学徒出陣」の世代に属しておられ、敗戦後の解放感と民主主義の高いうねりの中で自からの学問を鍛えられた。そうであるからこそ、その剛毅さは、旺盛な批判精神と一体となって、「戦後」が風化しつつあるいまの時代にかえって一層その輝きを増しているように思われる。いまは、ただ、この記念号を教授の研北に呈し、御退官後の御加餐とこれまでも増す学問上の御活躍をひたすらお祈りするのみである。

昭和61年1月

北海道大学経済学部長 長 岡 新 吉